

サーリヒーヤ物語

——ダマスクスのある街区から

三浦 徹

お茶の水女子大学文教育学部教授
早稲田大学大学院文学研究科客員教授

「イスラーム地域研究」とは、一九九七年に東京大学大学院人文社会系研究科を拠点として開始された「現代イスラーム世界の動態的研究」（科学研究費創成的基礎研究）の略称である。形而上的なイスラームと地域という具体物を結びつけたところに

妙があるわけだが、佐藤次高先生（当時の研究代表であり、NIHUIスラーム地域研究プログラムの前代表）ご本人は定義をされなかった。当初は、「地域研究はいかにあるべきか」「イスラーム地域研究はなにをめざすのか」という議論が行われ、同プログラムの成果として刊行された『イスラーム地域研究叢書』の第一巻は「イスラーム地域研究の可能性」と題している。その後継であるNIHUPプログラムになってからは、コンセンサスができたのか、あまり議論が聞かれなくなった。

私自身は、都市研究から出発したせい、か、地域研究や学際研究についての違和感はなく、むしろ親近感をもっている。そもそも都市を研究テーマに選んだのは、人間社会の一部を切り取るのではなく全体を扱いたいという単純な理由からであった。都市のさまざまな姿を記録するために、写真は不可欠であり、最初はニコンの重たい一眼

レフカメラと望遠・広角レンズをさげにいった。絞りもシャッター速度もピントもすべて手動で、カラーフィルムが高価だったので、一枚一枚ねらいを定めて撮ることになった。

やがて研究を進めていくと、自分が研究对象としている都市の特徴はなにかという問題を考えざるをえなくなった。なぜなら、当該の都市が他の都市と同じならあえて研究する意義がないことになるからである。他方で、まったく共通性がなくすべて異なっているのであれば、これまた特殊な例にすぎないことになる。つまり、他の都市との比較をしない限り、当該の都市の特徴や研究の意義はわからないということになる。このため、中東やイスラーム地域に限らず、訪れた都市の写真を撮り、地図や図録を買い集めることになった。

フォトエッセイは、イスラーム地域の知られざる姿を写真と文で提示することをねらいとしているが、研究者が撮影した写真は、現場で自分がなにを探し求めているのかを映す鏡でもある。ここでは、写真という現場証人をてがかりに、歴史史料と現地を往復した私自身の都市研究の軌跡をたどりながら、地域研究の方向を考えてみたい。

カシオン山からの眺望 手前にサーリヒーヤの町並み、緑の果樹園の向こうにダマスクス旧市街がみえる（1920年代の絵葉書）



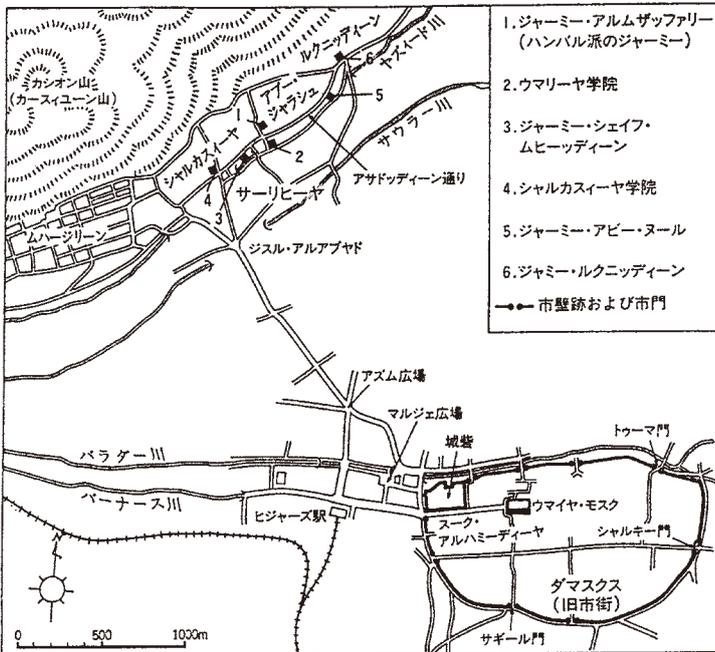
写真1-3 イブン・トゥールーン・モスクでの出会い(1978年)



写真1-1 カイロ、城砦前広場をよこぎる馬車(1978年)



写真1-2 カイロ、タハリール(解放)広場(1978年)。エジプト革命(1919年、1952年)にちなみ、このように呼ばれる。中央の記念碑は1980年代に撤去され、2011年の革命では群衆の広場となった



地図1 ダマスカスとサーリヒーヤ街区(『歴史と地理』第402号より転載)



写真2 カシオン山からみたダマスカス市街(1992年)

一九七八年のカイロ

中東の地をはじめ訪れたのは、一九七八年二月、二五歳のときだった。ある出版社の百科事典の編集部にて、ドイツ・東欧・中東・中央アジアを担当することになり、一ヶ月の休暇をとって、ドイツからトルコ・エジプトを旅行した。イス(タンブルではバーザール(カバルチャルシユ)で道に迷い心細い思いをした。カイロでは、ピラミッドや博物館でのバックシ(シュ(チップ))の要求に閉口したが、イブン・トゥールーン・モスクでわずかにアラビア語の会話ができたことで立ち直れた。「アラビア語を話せばアラブとみなされる」というのは板垣雄三先生の言葉だが、たしかに片言でも反応がちがった(写真一)。

カイロでの晩、日本人の研究者の寄りに招かれたとき、日本人研究者は果たしてエジプト社会を理解できているか、都合のよいところだけをつまみ食いしているだけではないか、というような議論になった。私が批判されたわけではないが、一旅行者にとっては耳の痛い話だった。黙ってほしいものを「自分は旅行者にすぎないが、安いコシヤリ(マカロニ・豆・揚げタマネギなどのまぜごはん)を食べ、法外なバックシ(シュ)を要求するピラミッドのガイドとも渡り合った。単なる観光客でいるつもりはない」という決意表明をしたことを言ったように記憶している。



写真5-1 ムザッファリー・ジャーミーでの礼拝。内部の構造はウマイヤ・モスクを模している(2010年)



写真4-1 アサドッディーン通り、サーリヒーヤ街区を東西に走る中心の通りで、マドラサ(モスク)や墓廟が立ち並ぶ



写真3-1 シェイフ・ムヒーッディーンの住居表示(2010年)、サーリヒーヤ地区、シェイフ・ムヒーッディーン街区、マダーリス(学院)通りと記される



写真5-2 ムザッファリー・ジャーミーのミナレット(1987年)



写真4-2 アサドッディーン通りを行きかう人々、後部に見えるのは改修中のドーム(1989年)



写真3-2 カシオン山遠景、住宅が山の上方に延びている(2000年)

サーリヒーヤ街区との出会い

六年後に出版社を辞めて大学院を受験するとき、卒業論文にかわる論文を書くことになり、都市をテーマに選んだ。このとき、佐藤次高先生からお借りした史料が、イブン・トゥールーン(一五四六年没)の『サーリヒーヤの歴史における珠玉の首飾り』(以下『サーリヒーヤ史』)であった。サーリヒーヤとは、ダマスカス北郊にある街区で、一二世紀中頃十字軍統治下のパレスティナからハンバル派のウラマーたちが移住したことがきっかけとなってできた町である。ダマスカスを見下ろすカシオン山の麓に帯状に街区が発展した。旧市街からは二キロ離れ、歩くと三〇分以上かかり、いわば飛び地にある。二〇世紀はじめの絵葉書を見ると、手前にはサーリヒーヤとダマスカス市内との間は緑の果樹園で埋まっている(冒頭写真・地図一)。

現在では、この地区は、「シェイフ・ムヒーッディーン」あるいは「アブー・ジャラシユ」とよばれる。前者はオスマン朝スルタン・セリム一世がエジプト・シリアを征服した直後に(一五一七年)、ここにあったイブン・アルアラビー(一二四〇年没)の墓所にジャーミーをたてたことによる。ムヒーッディーンはイブン・アルアラビーの尊称であり、後者は、このジャーミー(会衆モスク)の門前にあるスークの呼称にちなむ。最近できた住居表示板では、行政区画の名称としてサーリヒーヤの名も復活している。サーリヒーヤ街区の西側には、一九世紀にトルコ系の軍人や官僚

が移住し、ムハージリーンという街区ができた。第二次世界大戦後には、パレスティナ人などがサーリヒーヤに移住し、さらにこの二〇年で居住区は山の上へと延びつづけている(写真三)。

サーリヒーヤ街区を東西に横切る中心街を歩いていると、モスクや墓廟などの宗教施設がやたらに多いことに気づく。その多くには、半球状のドームを架けた墓廟がついていて、さながらお墓の町のようにみえる。それには、町の起源と形成が関わっている(写真四)。

山の中腹の飛び地に町ができたのは、ハンバル派のクダーマ家という宗教性をもった集団の「移住」が契機であった。十字軍へのジハードを掲げていたザンギー朝君主ヌール・アッディーンがモスクを寄進し、クダーマ家はウマリーヤ学院を建設、サーリヒーヤ初のジャーミー(ムザッファリー・ジャーミー)の建設のためには、遠く一〇〇キロも離れた北イラクのイルピルの君主から資金が届けられた(写真五)。一六世紀初めまでに、七つのジャーミー、一五五のモスク、三〇のマドラサ(学院)、四九の修道場、七四の墓廟が建設された。マドラサの数は、ダマスカス全体の二割をしめ、ウマリーヤ学院は三六〇の宿坊に五〇〇名の学生が滞在し、ダマスカス最大のマドラサとなっていた。他方、経済施設も整備され、同時期に九の市場、一三の隊商宿、一九の公衆浴場があった。しかし現在はマドラサの多くはモスクに変わり、あるいは一般の住宅となったり、廃墟となっ



写真7-2.3 ルクニヤ学院のドームの内部(左)と創設者の墓(右)。サーリヒーヤの宗教施設のドームは、90年ごろに一斉に赤色に塗りがえられた



写真7-1 ルクニヤ学院(現ジャーミー・ルクニッディーン)。二つのドーム(1989年)



写真6-1 血の洞窟モスクと参詣路(2010年元旦)



写真6-2 飢饉の洞窟。ひとつのパンを譲り合って40人の預言者が餓死したという逸話にちなみ、40の墓が並ぶ。血の洞窟と同じモスク内にある(2000年)

ているものもある。宗教施設だからといって、人の世のものでは永続しない。施設の管財人などが財産を私物化したためである。

サーリヒーヤ街区の形成

イブン・トゥールーンの『サーリヒーヤ史』は、歴史・地誌とサーリヒーヤに関わる人物の伝記集の二部構成になっている。歴史にあたる部分は、クダーマ家がパレスティナからサーリヒーヤへ移住をしたところで現存写本が途切れている。このため、どうやって街区が形成されたのかということとは、地誌に記述される宗教施設の建設者や建設年を手がかりに割り出していくという方法をとることになった。

マドラサの分析からつぎのような結論がえられる。三〇のマドラサのうち二一件は、アイユーブ朝時代(一一七四—一二六〇年)の八〇年間に集中して建設され、四年にひとつというペースで、墓廟の建設もこの時期がピークであった。すなわち、この時期に宗教施設の建築ブームが起こり、町の基盤が築かれた。宗教施設を建設する場合、ワクフというイスラームの寄進制度によって行われる。ワクフの本来の定義は、不動産を寄進し、その収益を慈善目的にあてることをいうが、典型的には、宗教施設を建設し、その維持・管理費に充当するために不動産を寄進することをさした。つまり、宗教施設の建設には、商店や隊商宿や果樹園といった経済施設の建設や寄進が伴っていたのである。

マドラサの建設者の七割は、支配層であ

る軍人やその親族がしめ、ハンバル派をはじめとするウラマーにとっても、軍人支配層の支援(パトロネージ)が不可欠であったことがわかる。他方、マドラサが帰属する法学派についてみると、ハンバル派の移住が契機であり、イブン・バットウータ

(二三六八/九年没)の旅行記に「住民は皆ハンバル派である」と述べられているにもかかわらず、ハナフィー派が六割をしめ、ハンバル派は三割であった。ではなぜ、軍人層は、ダマスクス市内ではなく、新興のサーリヒーヤに私財を投じて、マドラサを建設・寄進したのだろうか? 第一は、サーリヒーヤとカシオン山が、聖書以来のさまざまな伝承にちなむ聖なる地であったことである。なかでも有名なのは、カシオン山の上部にあるカインが弟のアベルを殺害したとされる洞窟で、モスクが建てられ、雨乞いの祈願の場所になっていた。私が初めてここを訪れたときは道もななく足を滑らせながら登ったが、現在では参詣路ができ、家族連れで訪れる人もいる(写真五)。第二は、コーランとハディースを基本とするハンバル派やクダーマ家の精神と行動が、学派の違いをこえ、君主や軍人を含めて敬虔な人々をサーリヒーヤにひきつけたことである。後にS・レーダー氏の研究によってわかったことであるが²⁾、

サーリヒーヤでは、一一一一—一四世紀にハディースなどの講読会が頻繁に行われ、いわばハディースの伝承・再生の場となっていた。現在のサーリヒーヤの住民に、町の起源を知っているかと尋ねると、古くから



写真8-1,2,3 揚水車。ヤズィード川の水を水車によって10メートルの高さまで揚げ(右上、左)、ムヒーッディーン・ジャーミー(右下)に給水する



写真7-4.5 シェイフ・ムヒーッディーン・ジャーミーに付設するイブン・アルアラビーの墓。祈願のため参詣する女性が多く、近年内部が改装された(上1989、下2010年)。アルジェリアの反仏民族運動の指導者アブド・アルカーデイルの墓もここにある。



写真9-3,4,5 ウマリーヤ学院の中庭(右,2001年)。宿坊(左上,1989年)は2010年には修復工事によって、全く姿を変えていた(左下)



写真9-1 ウマリーヤ学院のイーワーン(ホール)(1994年)



写真9-2 ウマリーヤ学院の下を流れるヤズィード川(1989年)

の住民は、ハンバル派の移住という出来事
をどこかで聞いたことがあると答える³⁾。

ウマリーヤ学院

『サーリヒーヤ史』の特徴は、宗教施設の
のひとつひとつについて、その位置や構造
が詳しく書かれていることである。初めて
『サーリヒーヤ史』を読んだときは、古い
研究書に付された構造図を手がかりに図面
を書いたりしながら読んだ。マドラサは法
学教育の場と考えられているが、施設の面
からみると、中庭を中心とその周囲に授業
を行うイーワーン(四半球状のヴォールト
をかけたホール)と宿坊(ハルワ)を配
し、図書館や礼拝場(モスク)や修道場や
墓廟が付属する場合もあった(写真七)。
井戸や貯水施設が必ず言及されているの
は、ムスリムの生活にとって礼拝の前の洗
浄などに水が欠かせなかったからである
う。ウマリーヤ学院には、温水施設があ
り、近隣の住民が入浴にきたという。マド
ラサは、教授や学生のみならず、近隣住民
を含む生活の場であったことがわかる(写
真八)。

ウマリーヤ学院は、創設以来、多くの寄
進をえて、建物を増築し、西側が旧館、東
が新館となっていた。一五世紀初めに財政
危機に陥ったときに、ハンバル派だけでな
くスンナ派の四つの法学派の教授と学生を
受け入れる方針に転換し、拡大したのであ
る。イスタンブルのオスマン文書館に所蔵
される一六世紀に編纂されたワクフ調査台
帳を調べると、一三一―一六世紀にサーリ



写真 11-1 中庭式住宅。ダマスカスの旧市街のシャッター一家の中庭 (1994年)

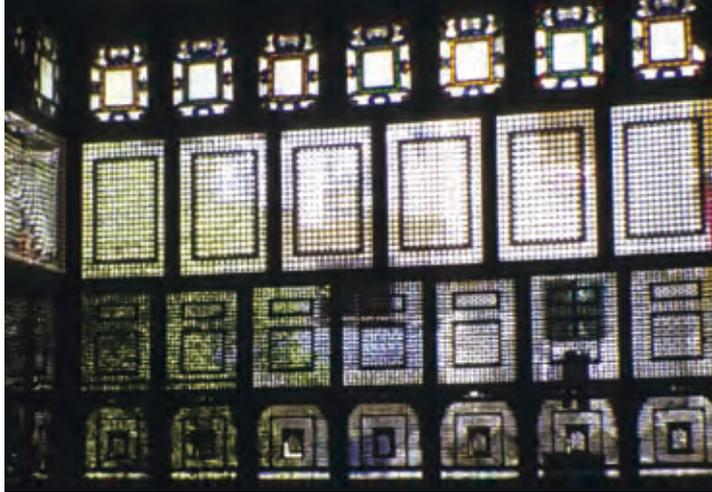


写真 10-1 カイロ、スハイミー家のマシュラビーヤ (格子窓) (2010年)



写真 10-3 サーリヒーヤの袋小路。メッカ巡礼を祝う飾り (1989年)



写真 10-2 ダマスカスの路地であそぶ子供たち (1989年)

袋小路と中庭式住宅

一九八八年夏には、佐藤次高先生を代表とする「イスラム都市社会の形成と変容に関する比較研究」(科学研究費国際学術研

中庭には、イーワーンとともに、二階建ての宿坊の遺構があり、アーチ状の暗渠の下にヤズイード川が流れているのをみつけたときは、思わず小躍りした。マムルーク朝末期(一六世紀初頭)に、マドラサの管財人は、盗賊(ヤクザ者)を用心棒に抱え込み、ヤズイード川に死体が流れてきても、総督に通報せずに勝手に葬ってしまったという年代記のシーンが思い浮かんだ。当時はサーリヒーヤなどダマスカスの主要な街区でヤクザ者が跋扈していたのである。宿坊の大きさは、畳二畳程度、見ようによっては牢の独居房にもみえる(写真九)。

ヒーヤ街区の宗教施設に寄進された四〇四件のワクフのうち、六割がウマリーヤ学院への寄進であり、特に四法学派に開放した一五世紀に急増していることがわかる。ウマリーヤ学院は、ハンバル派の衣を脱ぐことで、数百の不動産を抱える「大地主」になっていたのである。

旧館には、宿坊や給食施設があり、旧館の下をヤズイード川が流れているように記述されていた。これを読んだときは、読み間違いではないかと訝しんだ。一九八七年夏にはじめてダマスカスとサーリヒーヤを訪問したとき、ウマリーヤ学院はもはや廃墟となつて使用されず、門には鍵がかけられていた。



写真 11-4 観光客向けの中庭式住宅レストラン、サーリヒーヤ (2010年)



写真 11-5 シャッター家のイーワーン。周りにソファーをおき、家族の写真などを飾る (1994年)



写真 11-3 サーリヒーヤのアブー・ハーティム家の中庭 (1994年)



写真 11-2 シャッター家のイーワーン (1994年)

究)のメンバーとして、カイロ、ダマスカス、アレppo、イスタンブールなどの諸都市を、八尾師誠(イラン史)、鈴木董(オスマン史)、濱下武志(中国史)、陣内秀信(イタリヤ建築史)さんたちとまわった。当時はまだ、通常の科研究費では海外調査を行うことができなかったため、貴重な機会となった。研究代表の佐藤先生は、「街区を实地に歩いて回ろう」と提案した。これは、街区が都市の社会生活の基本単位であるにもかかわらず、その形態や社会関係は不明な点が多く、当時重点領域研究「イスラムの都市性」(研究代表者板垣雄三)の評価班代表の嶋田襄平先生(初期イスラム史、故人)は、都市の比較研究においては、パブリック・スペースよりも街区のようないくつかのスペースの研究が重要であり、そのためには歴史史料を用いた研究だけでは限界があり「四方を建物の壁で囲まれた小さな空間のなかでどんなことをしているのか」を实地に調査すべきだと提言していた。

カイロにつくやいなや、陣内さんがイスラムの中庭式住宅をみられないか、と川床睦夫さん(イスラム考古学、当時中近東文化センター主任研究員)にもちかけた。私は、ムスリムの家にはいることは女性の問題があるので無理だろう、と思い込んでいた。しかし、ダマスカスでは陣内さんが旧市街のキリスト教徒の住宅にするりと入りこんだ(写真一〇)。

調査隊一行とわかれダマスカスに居残った私は、知人ズヘイルさんの紹介でサーリ

ヒーヤ街区のジャーミー・アビー・ヌールの事務所に二週間寄宿し、サンダル履きでサーリヒーヤをくまなく歩き回った。ズヘイルさんに「街区と住宅の構造を知りたいので、家のなかに入ることができないか」と尋ねると、氏は、そんなことにならぬ興味をもつのかと怪訝な顔をしながらも、旧市街やサーリヒーヤの知人の家に案内してくれられた。少しコツがわかると、ひとり町歩きをするとき、暗い路地の奥におそるおそる足を踏み入れた。黒いヴェールをつけたおばさんに「とんでもない」と追い立てられることもあった。相手が男性であれば、アラビア語で自己紹介をすると、珍しがって自分の家に招き入れ、お茶をのみ、家族や近隣の話しをきけることもあった。

実際に住宅のなかにはいつてわかったことは、気温三五度をこえる夏でも住宅の内부는涼しく快適であることだった(当時はエアコンはついていないし、不要だった)。その理由は、高温であっても湿度が低く乾燥しているため、外気の熱や日差しを遮れば涼しいのである。このため、壁は厚く高く、戸口や窓は小さく、街路は細く曲げて作られているのである。四方を囲まれた中庭は、かならずどこかに日陰が生じ、風のおとる心地よい空間となる。とくに北向きのイーワーンは家族と来客の憩いの場である。両側を高い壁に挟まれ細く曲がりくねった路地は、幅広でまっすぐな郊外の通りとは異なり、つねに日陰ができ、快適な空間であった。この構造は、イスラムのルールに則り、外部の視線から女性を守る



写真 12-3 ダーナー一家。2010年には店は「ミニスーパー」の看板を掲げ、コンビニ(よろずや)に変身していた



写真 12-1,2 ダーナー一家の店。夏はアイスクリーム、冬はケーキ屋を営む。父は店を長男にゆずり、1994年に再会すると市議員に当選していた。左はそのポスター



写真 13-1 ナッカーシャート街区の中庭式住宅。バルコニーが階上の部屋をつなぐ(1994年)



写真 13-2 ナッカーシャート街区の雑貨屋。子どもが店番をする(2010年)

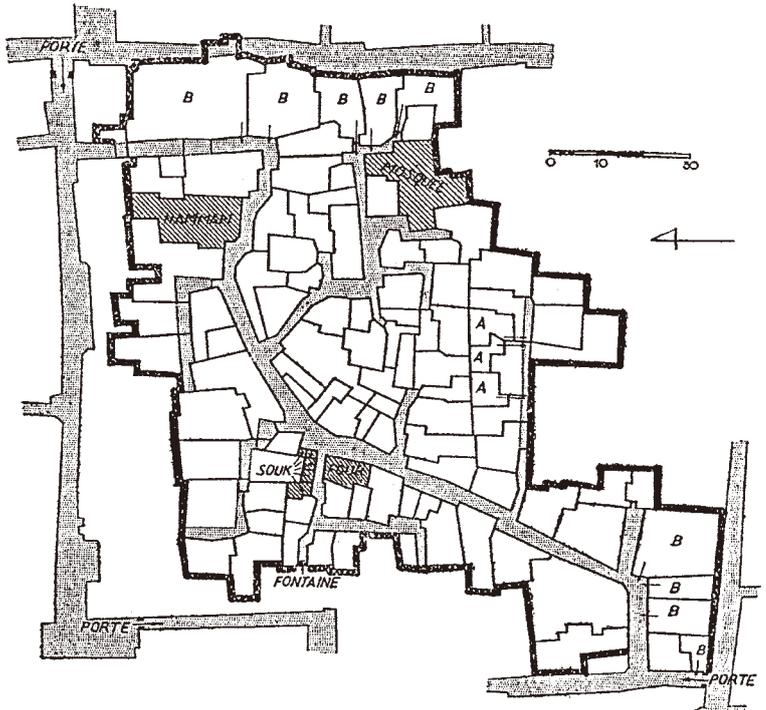


図2 ナッカーシャート街区、太線が街区の領域を示す(Sauvagetによる)。Bの印がついた家屋は、表通りに面しながらも、街区内の路地に戸口を開く。

役割も果たしている。ひとことではいえず、環境と生活に合わせた合理的に設計されている。イタリアなどの南欧都市のフィールドワークをしてきた陣内さんはこのことを察知していた。当時建築史の領域では、建築物を単に外側から見るとはならず、それを使いそこに暮らす人間の視点からみなおすことが主張されていた⁵⁾(写真11)。

街区の開放性

他方、中庭式住宅も袋小路も、その見かけとは違って、決して外に対して閉じてはいない。住まいの客室や中庭のイーワーンは、寄り合いの場所である。夕方になると、路上の片隅に椅子をだして、お茶を飲んだり煙草をくゆらせる人々もいる。挨拶をしてこれに加わることもできる。サーリヒーヤのダーナー家とはこうやって知り合いになり、当主が亡くなったいまでも、交流はつづいている。ただしこれは、男の寄り合いである。住宅の中庭や袋小路の奥は、女性の井戸端会議の場でもあった(写真12)。

街区(アラビア語ではハーラ、マハツラ、ハイイ、地域によってホームマ、バツワーベなどさまざまな呼称がある)とはなにか、地理的にはどういう領域を指すのか、はじつは難問である。図2は、ソヴァジェがダマスクスの「ある街区」というタイトルをつけて一九三四年の論文で提示した街区のモデルである⁶⁾。これは、旧市街のナッカーシャートという街区の地図で、同時期にシリアを委任統治していたフ



写真 14-2 フェスの住宅の鳥瞰。中庭にあたる部分にプラスチックの覆いがかけられている (2011年)

写真 14-1 アルジェの中庭式住宅跡。廃屋から建材や建築方法をかきま見ることができる

写真 14-3 チュニスのメディナの住宅街 (2012年)

ランス当局によって作成された地籍地図をもとにしている。彼が街区とした太線に囲まれた領域は、左上から右下に斜めに走る路地とそこから派生する袋小路に戸口を開く家屋の集合体を示している。すなわち、この街区では、道路が境界となつて区切るのはなく、街路(路地と袋小路)が家屋と住民を結びつけているのである。街区の境にあたるものは家の壁であり、その点で、街区は空間としても社会単位としても明瞭に区切ることのできないファジーなものである。私も含めてそれまでの研究者の「街区」のイメージは、街路を境界とするヨーロッパ都市の街区であり、それとは異なる原理で構成されていたわけである。

ソヴァジェの地図では、ナッカーシャート街区を横切る路地の両端に街区の門が設けられ、街区内には、モスク、公衆浴場、市場、井戸があり、まるで街区の住民は街区の外にでることなく、街区のなかで毎日暮らしていたようにみえる。また、街区が自衛・自治の機能をもっていたとするが、他方で街区同士の抗争や対立があり、街区は閉じた地域共同体として描かれている。しかし、当該の街区は、ダマスクスを代表するウマイヤ・モスクのすぐ南にあり、モスクの周囲には、大規模な市場(スーク)がある。街区の住民は、ウマイヤ・モスクで集団礼拝をすることもあれば、その近辺の市場や商店で買い物もしたであろう。街区内の施設は日常の用をたすものであつても、住民は街区内に閉じこもって生活をしていただけではない。街区は、社会生活上

のひとつの単位ではあつても、決して孤立的閉鎖的なものではなく、人のつながりによって、外と結ばれていたのである。

街区のネットワーク

サーリヒーヤ街区については、一五—一六世紀の史料から、それ自体でひとつの街区(ハーラ)とされながら、その内部に約三〇の小街区(ハーラ、マハッラ)があり、これらの複合体であつたことがわかる。後者の小街区の多くは、マドラサやモスクなどの宗教施設を核とし、その位置を地図上に同定することができる。税の徴収や政治的な意志決定は大街区を単位として行われていたことから、大街区が政治行政上の単位、小街区が日常生活上の単位と考えることができる。とくに政治権力が弱体化すると、サーリヒーヤでは、ウラマーやヤクザ者が街区を守る役割を果たした。住民は、法学派、宗派、教団、職業、血縁、地縁などさまざまな社会関係を通じて、他の街区や他の都市の人々と結び付きをもっており、街区は、このようなネットワークのひとつと考えるべきである。

ハーラには、路地と街区との二つの意味があり、街区は、路地によって結ばれた共同体ということになる。このような空間の構成原理は、日本の町屋と町(ちょう)と近似している。日本中世都市史の伊藤毅さんは、中世都市を形成する原理として、境内(核を中心とした同心円的な面集合)と「町」(道を軸とした線形集合)という対照的な原理を提示し、その組み合わせによつ



写真 16-2 サマルカンドの住宅の入口 (2010年)



写真 16-1 タシュケントの路地と家の戸口 (2010年)



写真 15-1 カイセリの路地。庭の樹木がみえる (1992年)



写真 15-2 カイセリの住宅の外庭 (1992年)



写真 17-3 佛山(中国広東省)の里(街区)門 (2001年)



写真 17-1.2 北京の胡同の路地(上)と中庭式住宅、右 (2002年)



中庭式住宅のひろがり

アラブ地域の中庭式住宅に興味を抱きだしたころは、これを中東の高温乾燥気候とイスラームの女性隔離との原理に適応した合理的な空間であることを強調した。マグリップのフェス、アルジェ、チュニスなどの旧市街にも中庭式住宅がみられるが、雨の多いフェスのそれは、屋根付きの中庭式住宅である(写真一四)。他方で、トルコの都市では、イスタンブールでもカイセリでも現在は中庭式住宅をみることはできず、庭が家屋の外にあつたり、中庭にあたるサロンが室内にとりこまれていたりする(写真一五)。一昨年、初めて中央アジアを訪れ、

サマルカンドやタシュケントでも、中庭式の住宅をみかけたが、戸口がえらく立派なところがアラブ地域と異なっていた(写真一六)。

他方で、中国の広州や北京を訪れると、そこにも細い街路(胡同)とそれに面して中庭式住宅がならび、里や坊とよばれる街区がみられる。胡同や巷は、街路の意味とそこに戸口を開く家屋群の意味とがあり、



写真17-6 カシュガルの中庭式住宅の入口(2002年)



写真17-5 広州の路地



写真17-4 北京の中庭式住宅の大きな門(2010年)



写真17-8 ソウルの中庭式住宅(マダン)の門



写真17-7 カシュガルの中庭式住宅(2002年)

ハーラと似ている。中庭式住宅は、四合院とよばれ、中庭を中心とし四方を棟が囲み、外側から中をみることはできない。四合院は、紀元前からみられる漢族の代表的な住宅様式で中国全土にみられるという⁶⁾。女性の部屋は奥に設けられ、そこには儒教の影響がみられる。この点では、同じく儒教文化の強い韓国にもマダンとよばれる中庭式住宅の伝統があり、現在のソウルの中心部にも残されている。

他方、中国の中庭式住宅では、戸口を家格を示す門構えとしてしつらえているところが、アラブ圏と異なっている。この点で興味深いのは、カシュガル(新疆ウイグル自治区)の中庭式住宅の入口がやや大きな門構えになっていたことである。これは、中国の影響なのか、それとも、同じトルキスタンのサマルカンドとの共通性とみるべきなのだろうか(写真一七)。

比較の手法

一九七八年にカイロを訪れてから三五年、訪問した国の数は二五か国を数える。中東やイスラーム諸国だけではなく、国際会議等のために訪問した欧米の都市もある。「三つ子の魂」とでもいうべきか、どこへいっても、路地や古い住宅をみると嬉しくなったり立ち止まり、写真を撮り、図をかいたりする。バンコクやパリのような大都会でも、路地裏は楽しい。生活のにおいがするからだろうか(写真一八)。

路地と中庭式住宅を媒介とする街区——
 どうやらこれは、イスラーム地域に限られ



写真 18-3 コルドバの住宅 (2010年)



写真 18-2 バンコクの路地 (2006年)



写真 18-1 ヴェネチアの路地、奥は水路 (2002年)

たものではなく、イスラーム以前の中東、イタリアやスペインを含む地中海地域、あるいは日本や韓国や中国などの東アジアにもみられることからしても、より普遍的な構造や現象と考えるべきなのだろう。中庭式住宅がアラブ地域の都市に存在する理由は、気候条件やイスラーム法によって説明できるわけであるが、イスラーム地域に限定されないより高次の理由(要因)が存在するというのである。

このような研究の手法を「原理的比較」となづけ、イスラーム地域研究叢書の『比較史のアジア』(二〇〇四年)の序章で提起した。中庭式住宅についてはそのようなスタンスの研究書が二〇一〇年に刊行されていることに最近気づいた。イスラーム建築史を専門とするナーセル・ラバト氏の編による『The Courtyard House (中庭式住宅)』は、副題「文化的論及から普遍的な連関性へ」がその方向を示唆している。中庭式住宅は、住居のもつシエルター機能(安全とプライベート)と外的環境への開放性(光と空気の取り入れ)という二面性を満たすための様式であると定義し、中東・イスラーム地域のみならず、韓国や北米、あるいは現代建築をも対象とした比較を行っている。

ソフトウェア

路地や住宅というハード(空間構造)に、地域に限定されない共通性があるとするれば、それぞれの地域や都市の違いは、どこにどのように現れるのだろうか? それ

は、人間の社会関係、社会のしくみによって生じると考え、これを私はコンピュータ用語をつかってソフトウェアと呼んでいる。

これについても、私の頭のなかにあるのは、サーリヒーヤ街区に関わる資料である。一九九四年に国際交流基金のフェローシップをえて、一年間在外研究の機会をえた。このとき、国立ダマスカス歴史文書館に所蔵される一九世紀後半のサーリヒーヤ街区のイスラーム法廷の台帳の研究に取り組んだ。イスラーム法廷台帳には、売買・賃貸借・借金などの個人間の取引が記録されており、個人を単位とした社会関係を分析できる。九ヶ月間、毎日文書館に通い、四冊約八〇〇点の文書を読み、必要なデータをパソコンにデータベースとして入力した。その多くは、不動産の売買・賃貸借の取引契約と相続に関する契約であった。手書きの文字の解読に苦しめられながら気づいたことは、当該物件についての記述が詳細なこと、取引の当事者のほか証人・保証人・代理人などやたらに人の名前がでてくることであった(写真一九)。

ここからわかったことは、つぎの二つである。第一は、あらゆる権利の主体は個人であること(家や法人といった団体は登場しない)、他方一つの物件には所有権や用益権といったさまざまな権利が設定され、個人は多種多様な権利を組みあわせて経営を行っていること(たとえば土地を賃借し、農具を所有し、果樹を分益小作契約で栽培する)。第二は、不動産の売買・賃貸



写真20 サーリヒーヤのスーク(市場)(2000年)



写真19-2 サーリヒーヤ法廷台帳。法廷は、サーリヒーヤのシャルカスイーヤ学院に置かれていた



写真19-1 ダマスカス歴史文書館、19世紀のアズム家の邸宅にある(2010年)

借や借金であれ婚姻や相続であれ、取引にあたっては、二名の証人をたて、イスラーム法廷に届け出、裁判官の認証をえて台帳に登録していることである。このことは、イスラーム法に定められていることであるが、それが忠実に行われていたのである。裁判においても、提訴内容の立証には証人の証言が必要であり、八二件の訴訟のうち、約八割は、原告側のたてた証人の証言によって、原告が勝訴している。これらの契約や裁判の証人の要件は、公正さであり、当該の内容について熟知している関係者である必要はなく、いわば誰でもなりうるのであった。逆に、自分のために証言をしてくれる人がいなければ、いかなる権利も守ることはできない。つまり、常日ごろから、人のネットワークをつくっておく必要がある。

先の五年分のサーリヒーヤ法廷台帳に取引の当事者として名前を記録された人は約三〇〇名、代理人や証人などの役で出廷した人はのべ三八〇〇人となる。当時の住民数は一万人と推定されるから、法廷の利用者はものすごい数である。そのほとんどは、名士録などの史料には名前がでてこない「名もないふつうの人」である。

人々が多様な権利を結び合わせて経営や取引を行うためには、個々の所有権が明確に区分されていることが前提になる。おもえば、中庭式住宅やマドラサ、あるいは市場の商店や隊商宿などの建築物はいずれも矩形が基本で、建築物の壁は、構造の境界であるとともに所有権の境界でもある。フ

ランス委任統治時代の地籍地図には、家と家の間の壁がどちらの所有であるのかが矢印で示されている。住民の間では壁の所有権も明確に意識されていた。矩形の建築物はいわばブロックであり、ブロックの自在な組み合わせによって都市空間がつくられ、社会が動いていたのである。カシオン山からのダマスカスの眺望(写真二)は、そのようなイスラームのブロック状の都市の姿を示している⁵⁾。

人びとのネットワーク

アラブ圏に限らずイスラーム地域の都市を訪れて感じることは、なんといっても、人と人、個人間の濃密で多面的な関係であろう。さきに言及したズヘイルさんは、ひとつの典型といえる。家族・親族、仕事、学問、などさまざまな友人のつながりをもっている。ダマスカスに滞在すると、彼は私を、夜の茶会(サロン)に連れていき、「友人の三浦さんで、日本の××大学の先生で、ダマスカスの歴史を研究している」というように紹介する。すると、難なくその環にはいることができ、私の研究や日本社会などについて、質問攻めにあうこともあった。お茶を飲みながら談論し、小一時間もたつと、ズヘイルさんはつぎの茶会に移動する。それを機に、一緒に移動したり、他の場所へいく人もいる。日本では、⁶⁾「はしこ」である。このような友人関係が、仕事の紹介や斡旋の「つて」ともなる。「信頼できる」ということが、雇う側にとっても雇われる側にとっても、重要



写真22-2 アブダビ、ショッピングモール (2012年)



写真22-1 アブダビのオシャレな高層ビル (2012年)



写真21 クダーマ家の墓地、その末裔という方が案内してくれた (1992年)

先のサーリヒーヤの法廷台帳に、証人などの役割で二三四回も登場するサカーアミーニーという人物がいた。たまたま谷口淳一さん(シリア史)が留学中にアラビア語をならっていた人が同姓であったことから、子孫ではないかと期待して会ってみた。彼は、伯父にあたる人物の家に連れていってくれ、そこで古い革靴に収められた同家にある契約文書を見せてもらった。さらに同家の人を何人か紹介してくれたが、法廷台帳に登場する当該の人物やその直系の子孫をつきとめることはついにでき

な要素なのである。アラビア語で友だち(サデーイク)を意味する単語の語根は「真実を語る」であり、友だちの友だちは「友だち」であり、こうして「友だちの環」が広がっていく。

調査や研究をする場合にも、人の「つて」が重要である。サーリヒーヤ街区のある宗教施設でたまたまクダーマ家の末裔であるという人物に出会った。話しをきけば、彼はビーズや自動車部品の貿易取引の仕事をするかたわら、投獄された囚人の家族の義捐活動をしている。クダーマ家の墓地に案内してくれたり(写真二二)、またクダーマ家のワクフ文書が残っていないかと尋ねたら、いろいろ電話をして、市のワクフ省にあるらしいという。ワクフ省を訪ね、上申書を書いて責任者に面会し、当該の史料がワクフの受益者名簿であることがわかった。しかし、現在の受益者の権利に関わるものであり、閲覧は許可されなかった。

先日のサーミルさんはオンライン版に移行し、彼の校閲作業はパソコン上でのものに変わっていた。詩人としても名を知られるようになり、インターネット上には彼の詩やその朗読の映像が掲載されている。サーミルさんは、会社が軌道にのり、シリアが

なかった。二二〇年前の人物なのであるが何者かはわからず、ごく「ふつうの人」が証人の仕事をしていったという結論にいたった。

アブダビから

締めくくりは、二〇一二年夏、ズヘイルさんとアブダビ(アラブ首長国連邦)で再会した話である。アブダビは首長国連邦の首都として、ドバイとともに急成長を上げている。彼は、二〇〇〇年ころに、同地の新聞社で仕事をしていた彼の年若い友人サーミルさんの紹介でアブダビに移り、〇四年に会ったときは国立図書館で職をえて、アラビア語史料データベースの校閲に従事し、夫人と中学生の長男をよび、娘が生まれた。他方サーミルさんのほうは、新聞社を首になり結婚式のプロデュース会社を立ち上げていたが、家族はシリアに戻っていた。その後音信が途絶えていたのだが、シリアが内戦状態となるなか、彼らの消息が気になった。アブダビの図書館にメールをおくったが返信はなく、いきなり図書館を訪問した。なんの前触れもなく八年ぶりに現れた私に、ズヘイルさんは驚くようすもなく、いつものように抱きかかえて私を迎えた。



写真22-5 アブダビ、サーミル家での食事(2012年)



写真22-4 アブダビ、裏通りのカフェの路上での礼拝(2012年)



写真22-3 アブダビ、シリアでの戦いを伝える衛星放送ニュースをみる(2012年)

ら夫人と四人の子どもを呼び寄せ、海沿いの高層マンションに住んでいた。何人かの親族が彼の会社で働いていた。逆にズヘイルさんの夫人と娘は、二年前にダマスカスに戻ったままで、毎日電話で様子をきいていた。二二歳になった長男はデザイン専門学校に通っていて、「父はこの国の王族と付き合いがあつて、いろんな友人を紹介しているのに、自分のことについては口利きをしてくれない。どう思うか?」と父にはわからないように英語で質問してきた。私は、「自分の息子だからこそ自分の力で仕事をしてほしいと思ってるから、口利きをしないのだろう」と答えた。

高層ビルが建ち並ぶ六車線の道路の裏通り(路地)には、雑貨屋や食堂やカフェがある。彼らのいきつけのシリア料理の食堂にいくと、そこはシリア人のたまり場でもあった。店のメニューはもちろん、雰囲気までも、ダマスカスの大衆食堂そのものだった。シリアや世界情勢についての彼らの情報ツールは、衛星放送やインターネットに移行しているのだが、個人個人への信頼と人のつながりという基本的な原理は変わっていないように感じた(写真二二)。

地域をこえる地域研究

フォトグラフとは、英語で「光による(photo) 記録(graph)」を意味する。日本語では、中国語の「真なるものを写す」という単語を借りて「写真」と呼んだ。前者では、人間の言葉や絵筆などを媒介とせず、客観的に対象を写しとることが前面に

ているが、後者では、撮り手が真をえぐり出すという能動的な意味も加えられている。他方で本稿の写真が示すように、一見客観的にみえる建物であれ、わずか数十年のうちに建て替えられ、塗り替えられていることから、外面だけでは実体はつかめないのである。二〇一一年三月からいままもつづくシリアの内戦で、サーリヒーヤ街区の姿も大きく変わっていくだろう。しかし、それでは変わらないものもあるに違いない。

地域研究においても、写と真の二つがせめぎ合っている。地域研究の出発においては、従来のデイシプリン研究がそれぞれの学問のコード(ルール、文脈)で地域を切り取ったことへの批判として、学際的・総合的な地域像の追求が主唱された。このため、文字資料のみならず、画像・遺物など現地の資料収集・保存に力が注がれた。他方、ひとつひとつの資料やフォトは、適切な解説(文脈)がなければ、全体像を欠いた断面にすぎず、誤解のもとにもなる。地域研究が「写真」であるためには、やはりコードが必要になるのである。

逆にいえば、それぞれの研究、著作、フォトには、作者の立ち位置や視線や姿勢がおのずと現れている。その意味で、これまでのフォトエッセイには、それぞれの筆者のイスラーム地域についての原像が映し出されているように思える。それらは、決して閉じた像ではなく、特定の時代や特定の地域をこえるものを映し出している。地域研究も同様に、特定の地域を対象にするとともに、地域をこえる研究なのである。



サーリヒーヤの入り口(ジスル・アルアブヤド)のマドラサ(モスク)から、街区の町並みを望む。正面はシャルカスイーヤ学院、山の頂ぎの右手に「血の洞窟」のモスクがみえる(1992年)

【註】

- (1) 三浦徹「イスラーム地域研究の發進」『歴史学研究』第七〇二号、一九九七年、私市正年「新しい地域研究論の模索」『ソフィア』第四六―四四号、一九九七年。

- (2) Stefan Leder, *Mu'jam al-samā' al-dimashqiyya: Les certificats d'audition à Damas*. Damascus: HEAD, 1996.

- (3) サーリヒーヤの歴史と社会については、「 Damas スクス郊外の都市形成：二一―一六世紀のサーリヒーヤ」『東洋学報』第六八卷第一―二号、一九八七年、「マムルーク朝時代のサーリヒーヤ：街区とウラマー社会」『日本中東学会年報』第四号第一分冊、一九八九年。「The Salihiyya Quarter in the Suburbs of Damascus: Its Formation, Structure, and Transformation in the Ayyubid and Mamlūk Periods」, *Bulletin d'Études Orientales*, 47, 1995.

- (4) このときの調査については、「サーリヒーヤを訪ねて①②」『歴史と地理』第四〇二、四〇五号、一九八九年、「イスラーム都市の形成と変容に関する比較研究」(科学研究費国際学術研究成果報告書)、一九九〇年参照。

- (5) Jean Sauvage, "Esquisse d'une histoire de la ville de Damas", *Bulletin d'Études Orientales*, 4, 1934.

- (6) 高村雅彦「中国の都市空間を読む」山川出版社、二〇〇一年、同「北京：都市空間を読む」鹿島出版会、一九九八年。

- (7) 「一九世紀 Damas スクスの法廷文書(一)(二)」『東洋文化研究所紀要』第一三五、一三七号、一九九八、九九九年、「Personal Networks surrounding the Salihiyya Court in 19th-Century Damascus」, *Études sur les villes arabes du Proche-Orient, XVII^e-XIX^e siècle*. Damascus: HEAD, 2001, "Formality and Reality in Shari'a Court Records: Socio-Economic Relations in the Salihiyya Quarter of Nineteenth Century Damascus", *The Memoir of the Toyo Bunko*, 59, 2002.

- 「イスラーム歴史紀行…人のいる社会・人のいる歴史(前編)(後編)」『歴史と地理』第四九五、四九八号、一九九六―一九九七年。
- (8) 都市形成のプロセスについては、「中世イスラーム都市の諸相」『シリーズ都市・建築・歴史3 中世的空間と儀礼』東京大学出版会、二〇〇六年を参照。